

教育長室だより

第 8 号

2018.12.14

師走の風は冷たいとしたものですが、今年の風は冷たいどころか12月初旬にして夏日を記録するという異常な暖かさです。冬、暖かいのはありがたいことですが、冬らしく寒い方が安心できる気もします。などと思っていると10日頃、突然真冬になりました。

○

師走はもともと「師」、すなわちお坊さんが12月の仏事で走り回ることから来ているようですが、「常に落ち着いて行動するはずの先生でも慌ただしく走り回るほど忙しい」という意味だという説もあります。

“先生は落ち着いて行動するもの”というイメージは今も生きているのでしょうか。12月だけ忙しいのでしょうか。

○

藍住町でも、中学校をはじめ小学校でも夜8時に職員室の電気が消えていることは珍しい状況です。朝は子どもの登校する前、7時30頃にはほとんどの先生が来ています。

「先生が満足するまで仕事をしているのだからいいのでは。」「税金から超過勤務手当を出しているわけでもないし…。」などという声も聞こえます。

どこに問題があるのでしょうか。

○

教師が忙しすぎると生じる問題には次のようなものが考えられます。

- ◇ 個々の子どもに丁寧に接することが難しくなり、子どもの細かな変化に気づきにくくなるので、いじめや不登校の兆候に気づきにくくなる。
- ◇ 授業準備が十分できず、授業の質が下がる懸念が生じる。
- ◇ 教師同士のコミュニケーションがとりづらくなり、学校が組織として統一的な活動ができにくくなる。
- ◇ 教師の心身の疲れが教師と子どものスムーズな意思疎通を損なわせる。

これだけでなくほかにもまだあるに違いありません。

○

今、文科省では「教員の働き方改革」に向けてさまざまな施策が出されようとしています。1カ月に45時間以上時間外勤務をしないようにしようという案も出ています。学校現場からは「それは無理な話だ」という声が上がっているようです。

学校の担う役割が変わらなければ、時間だけ短縮することが難しいのは当たり前ですね。そこで、今学校の担う機能の中で元来学校が受け持たなくてもいいことは何かということをも文科省は検討しました。それによると例えば「登下校に関する指導や事務的な仕事」は元来学校の役割でないとされています。そして各自治体や教育委員会で考えるようにと働きかけています。

○

しかしどうでしょう。例えば「学校は登校した後の子どもの指導や管理に徹する。」として、登下校の世話や管理を今すぐすべて放棄したら困ることはありませんか。もし、本当に学校の仕事でないとしても誰かがその役割を果たさなければ子どもたちの安心、安全は守られないのではないのでしょうか。

○

教員の働き方改革はすぐに進んでいくとは思えませんが、藍住北小学校では県の研究指定を受けてこの問題に取り組んでいます。北小学校の具体的な取り組みとしては次のようなものがあります。

① タブレットによる出退時間の管理

タブレットに教職員が自分で出勤時間と退庁時間を記録し、管理職も自分自身も勤務時間を把握し意識するということです。

② 「カエルボード」による自己管理

出勤時に時間の目盛りを書いたホワイトボードに「今日の帰る時間」に自分の名札を張っておくのです。この時間までに仕事を終わらせようという意識が生まれます。

③ スクールサポートスタッフの配置

週に18時間の勤務で職員の事務的な作業の支援をするスタッフを1名配置するというもので、県が今年から試行として始めた措置です。実際の先生方の勤務時間の削減につながっているという試算も出ています。

④ このほか、会議の持ち方や行事の運営の仕方の見直しや、事務作業の効率化など、学校としてできることにも細かく取り組んでいます。

○

日々子どもたちと接する教員が誠実に子どもと向き合うには、心の余裕が必要です。それが教員の働き方改革の主眼だと思えます。

これを進めるには保護者や地域の方々の理解が欠かせません。

今後、さらなるご協力をお願いをすることもあろうかと思えますので、その際には趣旨をご理解の上よろしくお願いしたいと思います。